

## 「井手元研一チェロ協奏曲の夕べ」～ひとことⅡ+

当夜使用の弓は1850年頃仏パリ製、特にチェロ弓が希少な“ピエール・シモン”です。(+シューマンのチェロ協奏曲が1850年10月ですので、この弓はこの曲の作曲とほぼ同年の作です。)

楽器の響きは、右(左)の技術が握る事は言うまでもありませんが、同様に弓のレベルも音(深さ輝き音量等)に大きく関係します。(80グラムの本一の棒で、どうして大きな差が生じるのでしょうか。一にも二にも楽器同様、製作者の実力です。また、弓は楽器以上に木の質が左右すると言われます。名人程、材料の見極めが厳しく、無限の可能性の削りで、デザイン、バランスを極めます。三には経年変化で力を増すこともあると思われまふ。当時は極上のペルナンビュコの弓材に恵まれていました。)

幸い今年、左右の手の閃きと弓を得て

「新たな音で、多くの皆様にご満足いただけますよう！」との願いです。

2019年11月 吉日

井手元研一